

奥州戦国悲譚

かさんじ 花山寺

～演劇とチェロ、神楽太鼓、朗誦による管弦講～

レクイエム

作・作曲・演出 大日琳太郎

新しい能を書きたくて筆を執った。

けれど決して現行の能を真似るのではなく、創成期の作り手たちが現代に生きていたらどんな作品が生まれるのだろうか、それを追求してみたい。だから出来上がった作品はもう能ではなく、まだ名前のない『何か』なのである。

副題にある管弦講（かげんこう）とは糸竹律呂をもって死者を慰霊すること。この劇は戦乱の奥州で土と化した名もない兵士や土民、百姓たちに捧げるレクイエムでもある。

音楽が舞台上で生演奏されるのは、日本演劇の伝統と私は考えている。この劇では男声合唱が重要であり、和声法による一般的な唱法だけでなく、ヴォカリーズ、摩擦音や破裂音を用いた発語・発声、能のツヨ吟のような気の声、声明・御詠歌にみられる読誦など、多種多様な声の響きを想定して作劇した。

この劇の音楽はただの伴奏や付随音楽ではないので、作曲に取り掛かる前に私を含めて作曲家、演出家、他スタッフらによる十分な協議を要望する。使用楽器の選定は作曲家に一任するが、劇中の水音や鐘の音なども効果に頼らず、できる限り演奏による生音で表現して頂きたい。

全九景中、クライマックスは第八景。筋の運び、生理的なテンポと強弱、視覚上の効果などすべてがそこに収斂する。これは序破急の発想である。またあらすじにおいては、能「嵐山」に登場する蔵王権現が隠れた主役となっており、劇中の主要人物である為清、為猶、清左衛門ら親子三代にこの蔵王権現の性格が付与され、第八景で舞われる「嵐山」のキリが視覚的な興を添えるのも見どころの一つである。

物語に裏打ちされているのは仏教的無常観であるが、蔵王権現の存在によって本地垂迹を劇化できたことは望外であった。決して厭世に陥らず、世の艱難に立ち向かって力強く闊歩する権現の姿を終幕に示現して、この鎮魂劇が現在生きている人達に生きる希望を抱かせる『何か』となることを祈る次第である。

あらすじ

時は天正十九年の秋。陸奥国では昨年の秀吉の仕置き以来、改易となった大名の旧家臣らによる反乱一揆が続き、伊達政宗を首領とした討伐軍によって凄まじい殺戮が繰り広げられていた。一ノ迫花山郷の地頭狩野家も断絶し当代の為清は追放を命じられたが、蔵王権現社別当の中條光信邸の納戸に匿われ一年が過ぎた。

嵐の晩、為清が二人の息子に仕舞「嵐山」の稽古をつけていると、長子の清左衛門はふつりと舞うのを止める。そして伊達政宗の謀略に無為の父を批判し、また五年前の母の失踪は父のせいだと非難して立ち去る。清左衛門は為清の実子ではなかった。そのためあらぬ噂を吹き込む者もあり、清左衛門は事あるごとに父に反発していた。

米沢から転封となった伊達家が明日はいよいよ岩手沢に入城するという日、清左衛門は馬を駆って単身岩手沢に乗り込む。が、そこで自分の実の祖父と偶然出会い、祖父の話から長年の誤解が解け、父の為清の真心を知る。そして心を入れ替え、父と祖父のためにも家名を再興しようと、岩手沢に逗留している徳川家康のもとへ直訴に向かうのであった。

清左衛門は、政宗の謀反を証拠立てる密書を懐中していた。それは一揆が政宗に扇動されたことを証拠立てる書状で、時節を待って公にするべく為清が隠していたものだった。清左衛門は徳川の重臣榊原康政に密書を見せて家康への取次ぎを頼む。が逆に、謀反の扇動者は政宗ではなくは秀吉であるとの真相が告げられ、清左衛門は怒り心頭に発し秀吉殺害を口走ってしまい、槍で突き殺されてしまう。

その頃花山村では、狩野家の祈祷所花山寺の大御堂取り払いが済み、為清は次男の清蔵と共に程野の谷に向かっていた。花山寺は先代の為猶を開基として三十余年前に建立された寺であったが、奥州仕置きにより破壊が命じられ、先代の黄金の墓もすでに程野の土中に埋められていた。為清はその場所で神仏と先祖へ不敬を詫び割腹しようとする、と驚いたことに先祖伝来の太刀が白い大蛇となって神託を告げる。「今宵、月影が花山寺の池に落ちる時、鐘を撞け」と。



為清は神託通り花山寺に向かい、夜更けの鐘楼に上って梵鐘を鳴らすと、取り払われた大御堂の跡に清左衛門と妻千代、そして先代為猶、三体の魂魄が現れる。清左衛門は岩手沢での己が絶命を知らせ、生前の不孝を深謝する。為猶の魂魄はこの世の無常と空無を説き、為清の痛んだ心に哀愍を垂れ、舞を舞わせて親子の別れを惜しませた後、清左衛門と千代を引き連れて池水の中に消える。

やがて景色は月影ばかり残る寺の跡となるが、魂魄に諭され迷いや執着心を捨て去った為清は、新天地を求めて花山の地を旅立って行く

作・演出・作曲：大日琳太郎

指揮：佐藤寿一

出演：大蔵基誠(為清) 福松子平(清左衛門) 山中景晶(清蔵)
角岳史(中條光信) 大蔵教義(左馬之助) 大立目博(榊原康正)
小仁所伴紀 遊々亭つばさ 栗原佑利匡 菅野宏昭(為猶)

演奏：海野幹雄(チェロ) 石坂玄士(神楽太鼓) 男声合唱：市民有志

パート・リーダー：大田翔 武田直之 鈴木集 振付：山中逞晶

能面作製：桜井重行 画：三木登 衣装協力：(株)松竹衣裳

床山：(株)山田かつら

舞台監督：尾熊英樹 照明：松崎太郎 音響：濱田一郎

Web. 広報：羽田憲弘

写真撮影：梶田博之



物語の歴史的背景

花山寺は宮城県栗原郡花山村に実在した寺である。寺のあった場所は現在水田となっている。

花山村は一迫川流域に広がった御嶽山を擁する田園地帯である。栗原郡の歴史は古く、続日本記によれば神護景雲元年、七六七七年の建郡である。村には前九年の役で阿部貞任が源頼義、八幡太郎義家と戦ったと伝わる古戦場淵牛館もある。花山の名は、蔵王権現の祀られている御嶽山の頂上一帯が、春になると石楠花で埋もれることに由来している。

狩野家は太祖を藤原鎌足とする旧家で現在も花山に連綿として続いている。実記、系図の類は奥州仕置き時に処分されたと見え、江戸後期に子孫によって記された覚書しか残されていないが、それによると狩野家は九代五郎左衛門尉伊豆守詮真の時、足利尊氏の命を受け奥州探題大崎氏の監視役として伊豆(静岡県田方郡狩野)から花山に下向したと言う。その後、地頭として土着、次第に豪族に成長し、全盛期には支配領域を花山村伊豆根から若柳伊豆沼まで拡げ、各地に伊豆に因んだ地名を今に残している。居城巳の口館は東西十五間、南西三十間にも及んだことが仙台領古城に記されており、十六代兵庫允為猶の時代には戸沢金山の開発で莫大な富を成し、同家の祈願所として花山寺を建立した。また為猶の墓は金造だったと言い伝えられている。

金峯山花山寺は、弘治三年頃に建立されたようで、七間四方の大御堂、山門、鐘楼、浄土庭園と池、中島に鐘楼という当時陸奥国屈指の大伽藍であった。飛騨から宮大工を招き、梵鐘は会津の鑄物師早山綱次に鑄造させ、本尊は丈六阿弥陀如来、脇仏には運慶作の不動明王像を奉安した。また、蔵王権現を阿弥陀如来の垂迹した姿と見なして、御嶽山の奥宮、村内の里宮も狩野家は厚く庇護していた。

しかし、栄枯盛衰は世の習い。狩野一族にも没落の日はやって来る。花山寺を建立して三十余年後の天正十八年、小田原討伐不参を理由に、奥州の大名、豪族はことごとく廃絶の憂き目に晒され、狩野家も断絶、当主(為猶の子)は追放、残った者は帰農を命じられる。その後、厳しい仕置きに対する不満から旧勢力の残党と土民たちが一揆を起こすが、伊達軍の徹底討伐を受け、佐沼城では二千五百人がなで斬りにされた。伊達家は一揆鎮圧後、米沢から岩手沢(現在の岩出山)への転封を命じられ陸奥国の新しい領主となる。この物語の主な景は、伊達政宗が岩手沢に入城する前日、天正十九年九月二十二日、花山と岩手沢を舞台としている。

花山寺は仕置きによって破壊退転を命じられ、本尊の阿弥陀如来は行方不明、為猶の金の墓も程野の谷に埋められたと伝えられる。梵鐘は慶長年間、仙台の龍宝寺に召し上げられたというが現存していない。物語に登場する備前長船長光作の太刀は第二次大戦直後に親族によって持ち出され、現在も不明。今では村に残された不動明王像と鰐口だけが狩野家と花山寺の栄華を伝える遺物となっている。

覚書によれば、追放となった為猶の子(名は不明)は下総の国に下り、孫の清蔵は後に花山の初代肝入を勤めた後、弟の清三郎にその役を譲り、自らはこの地の新領主遠藤家に仕官したと言う。

この物語は名前の知れない為猶の子を主人公とし、為清という名を与えた。そして為清に私の祖父の人生を重ねて描いている。祖父は狩野家の誇り高き末孫であった。物語には祖父から聞かされた狩野家の伝説や逸話も盛り込んである。

大日琳太郎